

読解 『失樂園』 (四)

道家弘一郎

A Reading of *Paradise Lost* (IV)

The main characters of Books I and II of *Paradise Lost* are Satan and his followers in Hell, while those of Book III are God and Christ in Heaven. Man appears on Earth for the first time in Book IV, and his creation is described in Book VII. In Book VIII, Adam asks God to give him a wife, and God does so, creating Eve from Adam's rib. The relationship of Adam and Eve is modeled on that of God and Christ in their oneness, and accordingly, the society of the Trinity is echoed in human society. Solitude is dissolved into Society by virtue of Love.

However, the Fall destroys the ideal society of Adam and Eve. Readers of *Paradise Lost* have been much impressed with the contrast between unfallen and fallen sexuality skillfully and beautifully described by Milton in both its bodily and spiritual aspects. On account of this beautiful description, Milton is saved from being viewed narrowly as an austere Puritan poet.

三．孤独と愛と社会

『失樂園』に登場する中心人物（？）は、第一・二巻は悪魔とその勢力であり、第三巻は神と御子である。もちろんその底流には人間があった。「人間の最初の不従順」という言葉で始まり、「アダムとイーヴの二人が手に手をとって、エデンの園を分けてゆく」姿で終るのであるから、この作品の主人公が人間であることは、改めて言うまでもない。しかし、その人間の姿が人間としてクローズアップされるのは第四巻になってからである。

人間の誕生

私はここでは、人間をその誕生から結婚へと通時的な流れに沿って見てゆくことにする。誕生といったが、アダムと、そしてイーヴだけは、その乳幼児期を持たない。いきなり成人の姿で登場する。そのアダム創造（誕生）の経緯は、第七巻、天使ラファエルの口を通して語られる。『失樂園』のテキストと、それが基づく聖書の該当箇所を並記する。

Paradise Lost VIII. 516-534.

Genesis 1. 26-28.

Therefore the omnipotent

26 And God said,

Eternal Father.../thus to his Son audibly spake:

Let us make *man* in *our* image,

“Let us make now *Mum* in *our* image, Man

after *our* likeness: and let *them* have dominion

520 In *our* similitude, and let *them* rule

over the fish of the sea, and over the fowl of

- Over the fish and fowl of sea and air,
Beast of the field, and over all the Earth,
And every creeping thing that creeps the ground !
This said, he formed thee, Adam, thee, O Man,
525 Dust of the ground, and in thy nostrils breathed
The breath of life; in his own image he
Created thee, in the image of God
Express, and thou became'st a living soul.
Male he created thee, but thy consort
530 Female, for race; then blessed mankind, and said,
'Be fruitful, multiply, and fill the Earth ;
Subdue it, and throughout dominion hold
Over fish of the sea, and fowl of the air,
And every living thing that moves on the Earth !'
the air, and over the cattle, and over all the
earth,
and over every creeping thing that creepeth
upon the earth.
27 So God created man in his own image, in the
image of God created he him ; male and female
created he them.
28 And God blessed them, and God said unto them,
Be fruitful, and multiply,
and replenish the earth, and subdue it; and have
dominion over the fish of the sea, and over the
fowl of the air, and over every living thing that
moves upon the earth.
(italics mine)

まず気付くことは、イタリックス下線部が示すように、めまぐるしい単複の交替である。そしてそれが聖書原文から来ていることである。

聖書では、神が「我々にかたどり、我々に似せて、人を創ろう」(創一26)と言われた、という。この神の複数に関する最も新しい聖書学の結論は、「文法的に熟慮の複数と呼ばれる用法。数上の複数ではない」ということで

ある（月本昭男、岩波『創世記』4、一九九七、月本氏のこの結論に至る考察は、日本基督教団・宣教委員会刊リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ『創世記注解1』58—60に—詳しい）。月本氏がこの結論に到達する前に検討した五つのケースを、黒崎幸吉の『旧約聖書略註上』（二九三六）はすでに網羅していて、「複数は威厳を示す複数ならん、或は多神教の名残なりと解し、又は三位一体の複数又は神の諸属性の複数又は思索を示す複数又は神がその同族を呼集め給ふ意味等と解する説もある」（同書7）と記す。矢内原忠雄の聖書講義（角川書店刊第四巻、一九四九）には、「多くの近代註解者の説の如く、天使を含む霊的存在としての意であらう。併しその中に神の三位一体の暗示を読み取る古き註解者の見解も亦棄て難きものがある。何となれば神の純粹に靈的なる自己充足性は三位一体の神觀に於いて始めて完いからである」（『創世記』37）とある。

一方『失樂園』では父が御子に語るのだから、*Let us make now Man in our image*, VII. 519. はきわめて自然である。だが次の行で *Man* を *them* で受けるのは、聖書がそうなっているからである。それが再び、524行と526行では神も人も単数となる。これもやはり聖書の言葉（創1—27）を繰返したのであろう。『失樂園』ではラファエルの語りとして、客觀的事実の描写である。529—530行では、神は、先ずは男を、次いで女を造り、二人を *mankind*, VII. 530. と呼んでいる。

創世記では27節のなかに単複が並存する。前半の単数が後半は複数となり、28節では複数である。この28節の複数形を、『失樂園』は *mankind* という単複同形の集合名詞で表わす。それと同様に519行目の *Man* もアダム個人であると同時に人類であって、それが520行目で *them* に変わることを読者は違和感なく受取るであらう。それにしても、このめまぐるしい単複の交替が聖書原文に由来する以上、聖書の注解を参照する必要がある。

アダムとは？

創世記第一章26節「人を造ろう」、27節「人を創造された」の「人」はヘブライ語では「アダム」である。そしてこのヘブライ語は、「集合名詞であり、したがって決して複数では用いられない。それは本来「人類」を意味する（ルートヴィヒ・ケーラー）。ルターが感情を込めてこの語を Menschen 「人々」と訳したのは、はなはだ適切であった」という（ゲルハルト・フォンラート、山我哲雄訳『創世記』78、A T D 旧約聖書註解1）。欽定訳の *The New English Bible* (1970) も man と訳しているが、最近の Bill T. Arnold の翻訳 *Genesis* (Cambridge Univ. Press, 2008) では humankind と訳され、それを them で受けている。そこには単複の交替による謎めいた感じはない。いちばん面食らうのは五章1・2節の「アダムの系譜の書」である。

神がアダムを創造した日、彼を神の姿に造った。男と女とに彼らを創造し、彼らを祝福した。彼らを創造した日、彼らを祝福して、彼らをアダムと名付けた（月本昭男『創世記1』リーフバイブル・コメンタリーシリーズ、185）。

すでに男の名は、土（アダマ）から造られたゆえにアダム（創二7）、女の名は、命（エバ）あるものの母となるがゆえにエバ（創三20）と名付けられたことを知っている。それなのに、ここでは、女もアダムと名付けられたことになる。これは「男と女に創造された人間（アダム）のうち男のほうがアダムと呼ばれたのではあるが、だからといって、男だけが人間（アダム）なのではない。神は「彼らの名」を、すなわち男と女とを含めて、人間（アダム）と呼んだ。というのだ」（月本前掲書、186―187）。いわば、女性の人間宣言、男と女の「一体」性（創二24）を表現するものであって、その先駆性に驚くほかはない。日本聖書協会版は、文語訳も口語訳も「アダム」と名付けられたとなっていたが、新共同訳では「創造の日に、彼らを祝福されて、人と名付けられた」とある。

人間の模範

では、この男女の「一体」性は、どこから来るか。創世記第二章18―24節、神は「人が独りているのは良くない。彼に合う助けを造ろう」といつて、男のあばら骨の一部を抜き取り、そのあばら骨で女を造った、男は女を見ると、「これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ女（イシャー）と呼ぼう、まさに男（イシユ）から取られたものだから」と叫び、二人は一体となる、という記事に基づく。

女が男の助けとして創造されたというが、何のための助けであろうか。楽園の管理・運営という仕事のためであるならば、他に多くの男を造ればよい。矢内原忠雄は『聖書講義 創世記』（角川書店、52―53）にこう記す。

神が人の助者^{たすけ}として女を造り給うたのは、人が愛に於いて孤独であったからである。思ふに神が神の像^{すがた}に象^{かたど}りて人を創造^{つく}り給うたといふ事も、神が人を「愛」に創造^{つく}り給うたといふに外ならないであらう。人は己が中に尽きざる愛の衝動を感じ、この愛の泉を注ぎ尽すべき対象をば己の外に求める。この愛の対象を見出して内なる愛と外なる愛とが合一する時、始めて人は「自己」を発見するのである。この故に人が愛の対象を与へられざる限り、人の創造は完成したと言ふを得ない。「人に適ふ助者」たる者が、土より造られた動物ではならず、又他の人を以ても足らず、人そのものの中より取出された女でなければならなかったのは、之が為めである。女は、本来男の内深く蔵された潜在的な熱愛が外に取出されて、別個の人格に具象化せられ、客観化せられたものに外ならない。この故に男女は二にして一、一にして二、性の創造の意味は神秘にして幽玄である。それは父なる神と子なる神との関係^{かたど}に象^{かたど}りて造られたる造化の至妙、創造の完成である。

三位
一体

人間は神にかたどって創造されたのであるから、神↓人間というベクトルで人間関係を考えなければならぬのは当然である。理想的な夫婦の関係が神の三位一体に範を仰ぐべきであることは、矢内原の聖書注解に示されるとおりである。

だが、それゆえ逆にまた、超越界のことが分かるはずもない人間に、三位一体の神を説明する手がかりとしては、彼が直接に知りうる人間界の消息、夫婦の関係をあげるよりほかには途がないということにもなる。ベクトルは人間↓神と逆転する。内村鑑三は『基督教問答』「三位一躰の教義」で、「ドウして三つ相集つて一つであることが出来る」かの説明に、創世記二章24節「人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一体となるべし」をあげる。すなわち夫婦たる者は二個別々のペルソナ性を有したる個人であるけれども、若し其意気相投じ、熱望相合するの場合に於ては二人は実に一躰と成るとの事実、……二人が一躰、即ち一人となる、而かも一人ではない二人であるとは教理学から言へば背理の最も明かなる者であるが、然かし愛情を有する人の特性として考ふれば決して怪しむに足りません(12・57)。

神から人間を見る場合も、また人間から神を考える場合も、三位また夫婦を一体たらしめるものは「愛」であった。

夫婦
百態

だが墮落後の人間に真の「愛」が期待できるはずもなく、そこに見出される男女の関係は理想の形態からは遠く隔ったものとなる。

- (1) 男がせっかく適当な配偶者をえたとって結婚しても、女が彼に不運や大失態をもたらす、あるいはいちばん望んだ女は、彼女が意地っぱりなばかりに結婚できず、しかもあろうことか自分より遙かに劣った

男と結婚してしまふ、また

(3) 女が愛を示してくれたのに、女の親たちの反対で結婚できない、ということもあり、さらには
(4) これぞ最高と思われる女にめぐり合ったというのに、そのときすでに自分は、もう見るのも嫌で、恥とも思
う仇敵のような女と結婚してしまっている。

よくも並べたてたと思うほど、ミルトンもまたしたたかなりアーティストであり、『失楽園』のなかでは珍しい一
節である。

For either

He never shall find out fit mate, but such

As some misfortune brings him, or mistake;

Or whom he wishes most shall seldom gain,

Through her perverseness, but shall see her gained

By a far worse, or, if she love, withheld

By parents; or his happiest choice too late

Shall meet, already linked and wedlock-bound

To a fell adversary, his hate or shame:...

X . 898-906

最後のケース(4)は、甥で伝記作者のエドワード・フィリップスが、ミルトンは妻メアリー・ポウエルが去った

後、ミス・デイヴィスに深く思いを寄せた、と記している事実を連想せざるをえなく (A. W. Verity, *Paradise Lost Books* □ and □, 131. B. K. Lewalski, *The Life of John Milton*, 184-85)。

この一節に関して語った矢内原忠雄『土曜学校講義』から、ほんの一部を引用する。

結婚というものは非常にむづかしい問題です。……結婚は重荷であり人生の禍いであることは、きわめて現実的な観察です。……私どものごく近いところでも結婚して一カ月で、しかもそれは非常に高い信仰的な期待と、信仰によって家庭を作るといふ燃え上った聖い野心をもって結婚した結婚であつたにかかわらず、同棲わずか一カ月にして妻は実家に帰つて夫のところへ帰つてこないといふことがある。現にある。これは最近、前の週に私の受けた最大の精神的打撃であります。(中略)結局結婚問題に頭をつつこんでしまうと、むづかしさのために私どもは圧倒せられてしまう。

この問題からわれわれを救うものは何だろうか。結局この世における結婚は……大した事柄じゃない、私どもが人生の第一義として考えるべき事柄じゃないということです。幸福な結婚をしたとか、不幸な結婚をしたとか、思ったよりは良い女房だったとか、あるいは期待外れの化け物であつたとか、そんなことで私どもがその渦の中に巻きこまれて苦しんでいたのでは息をつくことができない。人生は渦の連続であるし、矛盾のかたまりであるし、不幸の集積でもある。その中で現実の結婚だけが幸福であるなどということはありえない。幸福な結婚をしなければ人生がないと思うならば、人生はない。……そういう中であつて私どもがこれこそ自分の依り頼みであると考えるものは、一切の此の世的なものではない。すなわち神の真理である。キリスト自身、神自身、それと自分との結合。……神と共にあつて神と共にあるだけでいい。その他の自分の具体的な生涯とか境遇とかは、

……第一義的な問題でない。第一義的な問題は、造られたる一人のものとして神と共にあるならば、自分にぶらさがっているところの妻はわけのわからん妻であつても——ふさわしくない妻であつてもいいのだ。自分は妻から慰めを得ようと思わない。神自身、神直接にわれわれを慰めてくださる（『土曜学校講義(十)ミルトン楽園喪失Ⅲ』236-239）。

この講義は、終戦から一年半後の一九四七（昭22）年二月二日に行なわれた。矢内原は一九三七（昭12）年十二月東大を追われた。なか一年おいて、一九三九（昭14）年一月十四日、土曜学校を開校する。毎週土曜日午後二時から四時まで、定員三〇名に限り、自由が丘の自宅二階で開かれ、一九四七（昭22）年五月十八日まで続いた。第一回はアウグスチヌスの『告白』から始まり、『神の国』、『三位一体論』、『ペラギウス論争』と続き、ついでダントの『神曲』を読み、それを読みおえてミルトンの『楽園喪失』を読み始めたのは一九四五（昭20）年五月六日であった。終戦の八月には三回の休暇をとつて、二六日には再開している。この講義がそういう最も苛烈な情況のなかで、それにしては実に冷静に続けられたことが分かる。対象は彼を慕う少数の若者であった。調子はおのずから決まる（日暮勝英「土曜学校と私」土曜学校講義月報1、および矢内原伊作『矢内原忠雄伝』略年譜）。

さて、この夫婦百態を並べたてる一節の前に、ミルトンはアダムをしてイーヴに対し、捨てばちな悪態のかぎりを吐かせている、天国は男性の天使たちで充たされたのに、なぜ最後にこんな珍奇な者を造られたのか、天使のような男性だけでこの世界を充たすか、もっと別の繁殖方法を見つけられればよかったのに、女という性をもつ者のために、今回といい、今後といい、なんと無数のもめごとがおこることか、一本の余分な肋骨、ひねくれて不気味

に曲った肋骨など打棄てておかればよかつたものを (X 884—898)、と。

A・ファウラーは、この一節に伝記的言及よりも、アダムの予言が遙かに遠い未来を見通していることを考えるべきであり、滑稽なほど嘆きを書き連ねるのは、アダムの絶望の深さを示すが、ミルトン自身の思想ではない、ミルトンはわざとアダムに不埒な気分と間違つた意見を吐かせている、という。

アダムが言いたい放題のことを言い、遂には言うことも尽きはてて沈黙し、イーヴから顔をそむけていると、ここで予想もしなかつたことが起こる。イーヴは夫の面罵に反発することなく、とめどなく溢れる涙を拭おうともせず、髪をふり乱したまま、アダムの足もとに身を投げ出し、その足を両腕でかき抱きながら彼の赦しを求めたのである。そして、かの最も有名な台詞 (X 914—936) を口にする。初めは私を捨てないでくれとアダムに頼むが、やがて一切の罰は張本人である自分にだけ下り、アダムは赦されるようにと神に哀願する。テイリヤードは『失樂園』のクライマックスは禁断の実を食べる箇所ではなく、この和解を求め責任を引きうけようとする箇所にある、という (E. M. W. Tillyard, *Studies in Milton*, p.40)。

Eve,

Not so repulsed, with tears that ceased not flowing,

And tresses all disordered, at his feet

Fell humble, and, embracing them, besought

His peace, . . .

X. 909-913

最初の妻
メアリー

このイーヴの姿は、最初の妻メアリーが一六四五年、三年間の別居の後、ミルトンに和解を求めたと
 きを思わせる。ミルトン、ポウエル両家の関係者の骨折りもあって、ミルトンが親戚ブラックバラ家を
 訪問した際、別室に待っていたメアリーが姿を現わしたのである。ミルトンは「二度と見ることはない
 と思っていた女が、突然、彼の前に膝まづぎ、へりくだって赦しを乞うのを見て驚いた。初めは嫌悪と拒絶の表情
 をしたが、しかし、いつまでも怒りや復讐心をいだくよりは和解を好む生来の寛容な性質と、両家それぞれの友人
 の熱心な執成しによって、過去は忘れ、将来の長い和解の約束が実現した」と甥のフィリップスは伝える (Masson,
The Life of John Milton, III:437; Lewalski, *The Life of John Milton*, 185)。和解後は、彼女の死に至るまで仲睦まじく共に住み、
 四人の子までなしたのである (E. A. J. Honigsmann, *Milton's Sonnets*, 190)。

『失楽園』のこの場面(1090—936)について、藤井武は「くづほれたるエバのいぢらしき慰藉の辞。人類復興の兆し。
 叛きも女性より、和ぎも亦女性より」といい、矢内原も「これが本当にイヴのもつとも美しい態度」だと賛え、か
 つ、この背後に、メアリーが悔いてミルトンのところにもどり、涙を流してあやまったこと、ミルトンもまた妻を
 赦して迎えたという実際の経験があったことを記している(『土曜学校講義』140と243)。

climax ところで、アダムとイーヴに、二人の仲を執りもつ仲立ちはいなかった。二人はただ二人だけで和解を

vs 実現する。この和解の場面が『失楽園』のクライマックスと見なされる感動的な場面を構成している
 crisis れば、メアリー・ポウエルの功も顕者だったと認めなければならぬ。私はclimaxという言葉を使った
 けれど、ギリシア語の語源は「階段」を意味することから、一段づつ登って到達する山頂を指す。修辞において

も含意は同じである。としたら、やはりこの場面はテイリヤードの crisis という言葉の方がよいだろう。アダムとイーヴは禁制を犯した後、互いに罪を相手に着せあい、非難の応酬はますます激しさを増して続いた。それは登るといって高揚感よりも、一歩一歩谷底に下ってゆくような感じ。それがあのアダムの結婚への呪詛、イーヴ痛罵によって最低点に至りつくや、そのとき、イーヴはもう口答えはせず、自己の罪と責任を認め、それが転換点となる。Crisis の語源となるギリシア語は「分離・決定→転換点」を意味する。

三十三歳の厳格なピューリタンの詩人と、王党派の家庭で育った十七歳の娘とでは旨く行くはずがない、もともと相性が悪かったのだ、と思うのが常識である。だが、ミルトンは、妻の別居（二六四二年夏）を契機に、「結婚とは何か」を考え、翌年には『離婚の教理と規律』を出版したけれど、離婚はしていない。

「逝きし妻に」と題するソネット (Methought I saw my late espoused Saint) において夢にみた妻は二度目の妻 キャザリン・ウッドコックだとする通説に対し、W・R・パーカーやJ・T・ショークロスは、最初の妻メアリー・ポウエルだと考える (E. A. J. Honigmann, *Milton's Sonnets*, 190)。キャザリンとの結婚は失明後のことであるから、その顔は想像することさえできないはずだ。生き生きと想像することができるのはメアリーだけである。とすれば『失楽園』第四巻に描かれるイーヴのイメージに揺曳するのは、若き日の、恋に落ちたメアリーの姿であろう。

アダム 『失楽園』の読者の前に最初に示される人間の姿は、セイタンの羨望の眼を通すゆえにか殊の外美しい。と アダムとイーヴは直立して、丈高く、威厳にみちて「万物の王者 (Lords of all, IV. 290)」にふさわしい。

イーヴ その神々しい顔には創造主の栄光が輝いている。だが、二人は等しくはない。アダムは冥想と勇氣のため、彼はただ神のためにのみ、イーヴは柔和と甘く魅力的な優美のため、アダムの内なる神のために造られていた。彼

の美しい広い額と、高く天を仰ぐ眼は「絶対的な支配（Absolute rule, IV. 301）」を示し、ヒアシンス色の捲毛は房々と垂れるが広い肩の下までは延びていない。それに引きかえ、イーヴの長い髪は葡萄の蔓のように豊かな捲毛となつてゆるやかに波うち、細っそりした腰のあたりまで垂れ下がっていた。その長い髪は服従を意味するという。それは何故か。コリント前書十一章2―16節、パウロがコリント教会に与えた「礼拝でのかぶり物」についての指示による。「男は神の姿と栄光を映す者」であるから頭に物をかぶるべきではなく、したがって「男は長い髪が恥である」。それに対し、「女は男の栄光を映す者」である。「女は男から出て来たのだし、……男のために造られたのだから」、女は頭に（彼女が依存する）権威の印をかぶるべきである。そして「長い髪は、かぶり物の代わりに女に与えられている」もので、「女は長い髪が誉れとなる」。このように、この一節は、神からキリストへ、キリストから男へ、そして男から女へと続く秩序を説く箇所である。

いま「権威の印」（聖書教会口語訳）という訳を採ったが、新共同訳は「力」である。ギリシア語原文は *ἐξουσία*、ウルガタ訳ラテン語は *potestas* で、欽定英訳は *power*、独訳は *Macht*、仏訳は *autorité* である。ギリシア語は力、権威、権力、主権、支配、影響力等を意味する。いずれにせよ、こうして長い髪は女が男の支配に服すべき者であることの印となる。

イーヴ こういうコンテキストのなかで、イーヴの「服従（*subjection*）」は描かれる。ただし『失樂園』全篇の**の魅力** なかで最も心惹かれる一節であり、これほどイーヴの初々しい女らしさが表現されたところはない。

Subjection, but required with gentle sway.

And by her yielded, by him best received,
Yielded with coy submission, modest pride,

And sweet, reluctant, amorous delay. IV. 308-311.

従うとはいえ、彼が穏やかに主権を揮って求めればこそ

許すものの、恥ずかしげに慎ましく、淑やかななにも凜として

優しく、ふと抗う^{あらが}ような、艶めかしい躊躇^{ためら}いを見せつつ許すとき

彼には最も快く歓び迎えられる

二人がすつくと立ちあがった姿から髪型まで（四 288—307）は、男女それぞれの本性の描写であるが、この四行は性の交わりに至る過程である。次の行に「神秘につつまれた部分（those mysterious parts, IV. 312）」が言及されることによって分かる。イーヴの subjection「submission も、それぞれの語源は [sub + jacere to throw, cast]」[sub + mittere to send, put] である。「下にわが身を投ずる」「下にわが身を置く」という意味を響かせながら、アダムの Absolute rule「sway」と対比される。アダムの his shoulders broad, IV. 303 の一行下、つまりその真下にイーヴの the slender waist, IV. 304 が来つつある。subjection が「制圧」「submission が「降伏」「yield が「明け渡す、放棄する」を意味する場合があることを思えば、男女の交渉が「戦い」に近い軍事的「駆け引き」の要素を含んでいることは隠せない。

『オックスフォード英語辞典』には、

coy : 2. Not demonstrative; shyly reserved or retiring.

b. of actions, behaviour, looks, etc.

submission : 2. a. The condition of being submissive, yielding, or deferential; submissive or deferential

conduct, attitude, or bearing; deference; † *occas*: humiliation, abasement. *arch*.

modest : 3. Of women, their attributes and behaviour: Governed by the proprieties of the sex; decorous in manner and conduct; not forward, impudent, or lewd; 'shamefast'. Hence (in later use also of men), scrupulously chaste in feeling, language, and conduct; shrinking from coarse or impure suggestion.

OEDにはこのような語釈のもとに、わずか一行のなかから三語が用例として引用されている。

Yielded with coy submission, modest pride,

And sweet, reluctant, amorous delay.

IV. 310-311.

この二行に関し、矢内原は「非常に有名なところで……調子も大変いいし、modest prideとか amorous delay という言葉は、本当に言葉そのものに魅せられるような美しい言葉です。ある文学者は自分の詩人の生涯においてこういう二行を書くことができれば、他の仕事は何もしなくてもいいと言って激賞したほど有名な言葉です。正しい女性の男性に対する服従のもっとも美しい描写です」と言っている（『土曜学校講義八』481）。

ある文学者とは Walter Savage Landor (1775-1864) であろう。彼の 'Southey and Landor' (1846) には「私はミルトン以降全世界で書かれたどんな詩よりも、こんな二行が書きたかった」I would rather have written these two lines than all the poetry that has been written since Milton's time in all the regions of the earth. とある (*Imaginary Conversations*, in Landor, *Works* II. 64. cited in Le Comte, *Milton and Sex*, 91. James Thorpe, *Milton Criticism*, 368-369)。

この二行を含むこの一節のミルトンの描写は美に巧みである。長い髪は「気まぐれな (wanton)」捲毛となって波うっているが「服従 (subjection)」を示している。アダムも「力 (sway)」をもって要求するが、権柄づくではなくて「優しい (gentle)」。イーヴの「内気さ (coy)」もアダムを辟易させたり、てごずらせたりするほどではなく、みずから「素直に従う (submission)」。「誇り (pride)」は高いが女らしく「慎ましい (modest)」。「気乗りしない (reluctant)」かに一拍遅れて「ためらう (delay)」が「甘い (sweet)」「恋心に溢れている (amorous)」(*Burden, The Logical Epic*, 47)。「瞬見せるイーヴのはにかんだ気遅れ、それによってアダムの欲望はいっそう掻き立てられる。そしてそれはアダム自身が自覚していることでもある。彼は天使ラファエルに語る、「彼女の無垢、乙女らしいはにかみ、目立たず出しゃばらず控え目で、それだからこそ、いっそう望ましく思われる彼女の美德、求愛されたい、求められないのなら渡したくない自分の価値への思い、——要するに罪の思いの少しもない自然の情が働

いて、私を見ると逃げたのです」。

... innocence and virgin modesty,

Her virtue and the conscience of her worth,

That would be wooed, and not unsought be won,

Not obvious, not obtrusive, but retired,

The more desirable — or, to say all,

Nature herself, though pure of sinful thought —

Wrought in her so, that, seeing me, she turned ; ...

VIII. 501-507.

Fallen

これと対照的なのは墮落後の二人である。偽りの果実は二人の心に肉欲を燃えあがらせ、アダムがイヴに淫らな視線を投げかければ、イヴもまた同じく浮気に彼にこたえ、二人は情欲に燃えた。

Sexuality

that false fruit

• • • • •

Carnal desire inflaming; he on Eve

Began to cast lascivious eyes; she him

As wantonly repaid; in lust they burn, ...

IX. 1011-1015.

アダムはイーヴに、「初めてお前を見て結ばれて以来、こんなに完璧なまでに輝くお前の美しさが、お前を楽しみたいという熱い欲望を燃え上らせたことはなかった」

never did thy beauty, since the day

I saw thee first and wedded thee, adorned

With all perfections, so inflame my sense

With ardour to enjoy thee, fairer now

Than ever —— . IX. 1029-1033.

と語って、「情事を意図する視線と愛撫の手を差し出すと、イーヴまたよくそれを心得、燃え移った火のような流し目を返した」。

he . . . forbore not glance or toy

Of amorous intent, well understood

Of Eve, whose eye darted contagious fire, IX. 1034-1036.

彼は彼女の手をとり、頭上高く鬱蒼と緑に覆われた木陰の台地に、「これまたまんざら嫌でもなさそうな彼女を連れていった」。

He led her, nothing loth. IX. 1039.

彼らは、美しい草花の群がり咲く大地の膝を褥として、心ゆくばかり歓楽のかぎりをつくした。それは二人の咎の証であり、罪の慰めであったが、やがて、肉の甘い戯れに疲れ果て、快い眠りに襲われた。

（私が舌を巻いたのは、nothing lothにつけた繁野天来の翻訳である。「稲舟の否にはあらぬ」という。おそろく新内節から借りたと思われるが、もとは古今集東歌1092「最上川のほればくだる稲舟の否にはあらずこの月ばかり」に溯り、「稲舟の」は「いな」を引出す序詞である。）

注目すべきは墮落後のイヴのこの変りようである。まさに「二人が互に犯した咎の証し (of their mutual guilt the seal, IX. 1043)」である。彼らは、まだ人目を憚る必要もなかったから、思いきり「愛欲に燃えた (in lust they burn, IX. 1015)」偽りの果実」の効果は、蛇の教えたのとは「全く別な作用をまず最初にひきおこした。それは燃えさかる肉欲を焚きつけたのである」。

But that false fruit

Far other operation first displayed,

Carnal desire inflaming:...

IX. 1011-1013.

罪の結果は Carnal desire, lust に燃えさかることであった。

unfallen
sexuality

では、罪を犯す前のアダムとイーヴはどうだったか。再び第四巻に立ち戻ってみよう。性欲を恥と感じるのは、原罪の結果が先ず肉欲昂進となって現われたからである。恥は罪の結果の産物であるから、「罪から生まれた不純な羞恥、不面目なる面目 (Dishonest shame/... honour dishonourable. / Sin-bred. IV. 313-315.)」という表現は、まことに至当である。それゆえ、墮落以前は「あの神秘的な部分も、ただこの時には隠されていたいなかった (Nor those mysterious parts were then concealed. IV. 312.)」のである。

彼らは心に一点の邪心もなかったから、神や天使に見られることを少しも憚ることなく、裸のまま手に手をとって歩いていた。二人はこの後に生まれたいかなる男女よりも眉目秀麗、容姿端正な美男美女であった。

Adam the goodliest man of men since born

His sons, the fairest of her daughters Eve.

IV. 323-324.

住居も食事も楽園にふさわしい生活のなかで、二人は「優しく語り合い、親しげに微笑み合うのは勿論のこと、他人の眼を憚る必要もなかったので、幸福な夫婦の縁に結ばれた一組の美しい男女にふさわしく、心ゆくまで若さに溢れる愛撫に打ち興じました」(四 337—340)。

先にはアダムが、初心^{ちしん}な処女^{ぢよ}イーヴの手をとって引き寄せたが、次の光景は成熟したイーヴの方から進んでアダムに寄りかかる姿だ。彼との「柔らかな抱擁 (soft embraces. IV. 471.)」の記憶に点火されたイーヴの「目差は、決して咎められるべきでない妻の媚、夫にすべてを任す優しさ」を浮かべて、「半ば抱くように人類の父なるアダ

ムに寄り添った。ふさふさと豊かに垂れる金髪の下に隠れて、豊かに脹らむ彼女の乳房は裸わに彼の胸と半ば接した。彼女の美しさと、黙って身を委ねる魅力を歎ぶ彼は、優者の愛をもって頬笑む、かつて五月の雨を降らす雲を朶ますとき、ジュピターがジュノーウに頬笑んだごとく。アダムは妻イーヴの唇に唇を押しあて、清らかな接吻を繰返した」。

our general mother . . . with eyes

Of conjugal attraction unreproved,

And meek surrender, half-embracing leaned

On our first father; half her swelling breast

Naked met his, under the flowing gold

Of her loose tresses hid. He, in delight

Both of her beauty and submissive charms,

Smiled with superior love, as Jupiter

On Juno smiles when he impregns the clouds

That shed May flowers, and pressed her matron lip

With kisses pure.

IV. 492-502

それを見て羨むセイタンの言葉は巧みだ。舌打ちが聞こえてくる、今に見ておれ!!

Sight hateful, sight tormenting! thus these two,

Imparadised in one another's arms,

The happier Eden, shall enjoy their fill

Of bliss on bliss; . . .

IV. 505-508.

「見るだに憎たらしく、悩ましい眺めだ！二人はお互いの腕に抱かれて、エデンにまさる幸せな楽園のなか。しばらくは至福の上に至福の時を満喫させてやろう。」

しかしこれはやがて失わなければならない楽園にすぎない。セイトンの言うとおり、「今はまだ幸福な夫婦よ！生命あるかぎり生きて、束の間の悦樂を楽しむがよい、やがて長い苦しみが続くのだから」。

Live while ye may,

Yet happy pair: enjoy, . . .

Short pleasures; for long woes are to succeed.

IV. 533-535.

一日の仕事が終り、夕べの祈りを捧げると、二人は四阿の奥に入り、並んで横たわった。アダムが美しいイーヴから背を向けることも、イーヴが「夫婦愛の秘儀 (the rites / Mysterious of conjugal love, IV. 742-743)」を拒むこともなかった。

Hail wedded Love, mysterious law, true source

Of human offspring. . . .

IV. 750-751

「栄あれ、結婚愛よ、神秘なる法則、人類繁栄の真の根源」と称えられる。「親密な血縁関係、父と子と兄弟のすべての情愛 (Relations dear, and all the charities / Of father, son, and brother, IV. 756-757)」「一家団欒の楽しみ (domestic sweets, IV. 760)」すべては結婚愛によってもたらされたものである。そのような夫婦の肉体的結合は「清浄無垢 (undefiled and chaste, IV. 761)」なものであった。

それに引きかえミルトンが嫌悪したものは、「愛も喜びも、親しみもない、金で買われた娼婦の微笑、一時の浮気や、宮廷の恋愛沙汰、男女入りまじつての舞踏、淫らな仮面劇、深夜の舞踏会、傲慢な美女に恋にやつれた男が歌う小夜曲」(四 765—770) などであった。

これまで墮落を境にして、男女の性関係がどう変ったかを見てきた。それではアダムのいわゆる uxoriousness (妻ノロジ) に対し、理想的な性関係がどういうものか、天使ラファエルがアダムに論ず言葉を見ることにしよう。

ラファエルの忠告

「イーヴの外面は確かに美しく、お前の愛撫と尊重と愛情とを受けるに足るものである。だが、お前はそれに隷属してはならない。自分と彼女との重みを比べてみて、その上で評価するがよい。義と正とに基づき、よく自制された自己評価ほど有益なものはない。」

Of-times nothing profits more

Than self-esteem, grounded on just and right.

Well managed, . . .

VII. 571-573.

right は OED にこの箇所が引用され、

3. a. That which is constant with equity or the light of nature: that which is morally just or due.

とある。「自然の光」と一致するということは、自然・人間・水平の次元での善・正しさを意味する。それとの対比で just は超自然・神・垂直の次元での義を意味すると思う。Lockwood は、just は justice (因みに justify は to show the justice of) 、right は rightness と justness (righteousness ではない)

そのような能力をお前が身につければつけるほど彼女はお前を頭と認め、その外面のすべてをあげて、お前の内面にあるもののために仕えるようになるだろう。彼女はお前を喜ばせるため、いつそう美しく装い、お前の心に深く彼女を崇める気持ちをおこすものとなるだろう。お前は当然にも、一途に心をこめて妻を愛するようになるはずだ。何しろ彼女は、お前が少しも賢くは見えないときを知っているのだから。

of that skill the more thou know'st,

The more she will acknowledge thee her head,

And to realities yield all her shows:

Made so adorn for thy delight the more,

So awful, that with honour thou may'st love

Thy mate, who sees when thou art seen least wise.

VIII. 573-578.

skill : 6. a. Capability of accomplishing something with precision and certainty; . . .

adorn : Adorned, ornate. OED の用例中の箇所のみ。

awful : 2. Worthy of, or commanding, profound respect or reverential fear.

3. Solemnly impressive ; sublimely majestic.

honour : (Lockwood) nice sense of and strict allegiance to what is right or due.

最後の一行 Thy mate, who sees when thou art seen least wise. が何を意味するかは分かりにくい。

従来の邦訳はいずれも、‘アダムが失敗をするか愚行を演ずるかのような解釈であり、そしてここに一組、世の常

の愚夫賢妻の誕生となるが、いささか唐突な感じがする。かつ失敗や愚行は第三者の存在、それとの比較を想定しているように思われるが、人間はまだアダムとイーヴの二人だけである。かりに今後、第三者が存在するとしても、それは二人の子か孫である。とすれば、子や孫と比較して賢愚を比べることはないだろう。したがってここに第三者は介在しない。

なによりもラファエルから、このような警告をうけた理由は、直前のアダムの科白にある。「彼女の美しさに接すると、彼女は完全無欠で本来自ら完成された者、それゆえ自分の本質をよく知り、したがって、その為そうとすること、言おうとすることは、いずれもこの上なく賢く、正しく、分別に富み、最善なるもののように見えます。どんな高尚な「知識」も彼女のの前では格を落とし、どんな「知恵」も彼女と話していると顔色を失い、「愚鈍」のように見えます」(八 546—553)。

All higher Knowledge in her presence falls

Degraded: Wisdom in discourse with her

Loses discountenanced, and like Folly shows: . . . VIII. 551-553.

イーヴの「同席」や、その「会話」だけで、アダムの「知識」も「知恵」もこれほど形無しで、これほど「愚鈍」になるとすれば、それが極まるときは「夫婦愛の秘儀 (the rites / Mysterious of conjugal love, IV. 742-743)」に臨んだときであろう。それゆえ、「お前が少しも賢くは見えないや (when thou art seen least wise, VIII. 578)」とは夫婦の秘事(或は秘時)の婉曲的表現と思われる(また、どの翻訳もこの節を副詞節ととっているが、いっそ

名詞節ととって sees の目的と見る方がよい。またここにはアダムの uxoriousness に対するラファエルの揶揄のトーンも聞こえる。さればこそ次行は直ちに、人類繁殖のためには必要な「肌の触れ合」(the sense of touch, III, 579) が話題に上るのである。

こゝでも矢内原忠雄の解説が面白い（『土曜学校講義 九』427—428ページ）。

「なんぢら慧からぬとき慧く」（藤井武訳）は直訳すると「なんじがいと慧からぬ時に見るもの」who sees when thou art seen least wise、おもしろい言葉です。sees と seen が使われていて、なんじがもつとも少く賢く見えるときに、すなわちなんじがもつとも賢くなく見える時に見える——見えるというのはいく目が見える。学問上の問題、論理上の問題についてはごくごく例外的にすぐれた能力のある女性もありますが、概していうと女性には男性に及ばないですね。だから学問的な問題において女性が男性よりもよく物を見るのはそれは少ないし、またすべての男性が学者であるわけでもありません。ただ生活に関する問題においては人間の生き方、生きる道について trouble 困難なことが起つてきますと、男性はわからなくなることがある。どうしていいかわからないから心がくしゃくしゃして、いらだつて混乱する。そういう時に女性がよく見る。素直な、そして控え目な、つましやかな女性の目の方が整頓しており、どうすればいいか判断があまりなくて、しかもそれが非常にはっきりできて、これによって男性を助ける。そういうことは結婚生活においてしばしば人の実験するところですよ。

矢内原がこれを語った日は、一九四六（昭和21）年六月十六日、矢内原の年譜でみると、八年に及ぶ追放を経

て、一九四五年十一月、東京帝国大学教授に復帰した翌年、五十三歳のときである。後に希代の東大総長として聞こえた矢内原に、この言葉があるかと思うと頬のゆるむのを覚える。

さて、第八巻におけるラファエルの忠告は続く、「the sense of touch (Ⅲ 579) は人類が繁殖するために必要であるとはいえ、これが何よりも強い悦楽よろこびと思われるときには、家畜やあらゆる動物にも与えられていることを思え、もし、その楽しみが人間の靈魂を圧倒し、情熱を動かすに足りるものならば、そのような感覚が動物にひとしく分かち与えられているはずがない」。

それゆえラファエルの究極的な忠告は、「お前が彼女との交わりにおいて魅力的で、人間的で、理性的だと思ふ高尚なすべてのものを常に愛するがよい。愛することは、よいことだ。しかし情熱に燃えてはならない。そこに真実な愛は含まれていないからだ。愛は思いを清め、心を広くする。愛は理性に基き、正しい判断をする。愛は、お前が肉の快楽に溺れることなく、神の愛へと昇ってゆく階梯となる。そのためにこそ、動物のなかにお前の伴侶は見出されないのだ」。

What higher in her society thou find'st

Attractive, human, rational, love still:

In loving thou dost well; in passion not,

Wherein true love consists not. Love refines

The thoughts, and heart enlarges; hath his seat

In Reason, and is judicious; is the scale
By which to Heavenly love thou may'st ascend,
Not sunk in carnal pleasure; for which cause
Among the beasts no mate for thee was found.

VIII. 586-594.

(未完)

